

「パウロ、ユダヤ人たちに宣教する」

2016年10月18日

使徒言行録 28 章 23 節～28 節　そこで、ユダヤ人たちは日を決めて、大勢でパウロの宿舎にやって来た。パウロは、朝から晩まで説明を続けた。神の国について力強く証しし、モーセの律法や預言者の書を引用して、イエスについて説得しようとしたのである。ある者はパウロの言うことを受け入れたが、他の者は信じようとはしなかった。彼らが互いに意見が一致しないまま、立ち去ろうとしたとき、パウロはひと言次のように言った。「聖霊は、預言者イザヤを通して、実に正しくあなたがたの先祖に、語られました。

『この民のところへ行って言え。あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、／見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、／耳は遠くなり、／目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、／耳で聞くことなく、／心で理解せず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない。』

だから、このことを知っていただきたい。この神の救いは異邦人に向けられました。彼らこそ、これに聞き従うのです。」

ローマに護送されたパウロは早速、ローマに在住するユダヤ人の主だった人々を招き、説得しようとした。自分は同胞のユダヤ人にも、先祖の慣習にも逆らうことは何一つしていない。総督から取り調べられ、無罪と認められたが、ユダヤ人からエルサレムで裁判をするように要求された。エルサレムで裁判を受ければ、暗殺者たちから逃れられないと思い、皇帝に上訴した。この上訴は同胞を告発するものではない。自分はイスラエルが待望しているメシア的希望、主イエスの死者からの復活に関して、鎖につながれている。パウロは自分は無罪であり、また、主イエスの福音宣教の使命を持つ者であると語った。ユダヤ人たちはパウロについてエルサレムから何の書面も受け取っていない、また、何か悪いことをしたという報告も受けていない、ただ、パウロが宣べ伝えている「分派(イエス派)」に反対があることを耳にしているの、そのことについて直接聞きたいと応答した。

日を決めて、ユダヤ人たちがパウロの宿舎にやって来た。パウロは、朝から晩まで、神の国について力強く証しし、モーセの律法や預言者の書を引用して、イエスについて説得した。神の国は神が生きて働く現実であり、ユダヤ人が切望していた世界である。モーセの律法や預言者の書に書かれていることは主イエスの十字架と復活において、実現している。主イエスは神の国を示し、罪の赦しと神の命に与る救いを与えてくださったと、言葉と思いを尽くし宣教した。ある者はパウロの言うことを受け入れたが、他の者は信じようとはしなかった。彼らの意見が一致しないまま、立ち去ろうとした時、パウロは「この民のところへ行って言え。あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、／見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、／耳は遠くなり、／目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、／耳で聞くことなく、／心で理解せず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない」と言った。この言葉はイザヤ書 6 章 9 節、10 節からの引用である。神が「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか」と言われた時、イザヤは「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」と召命に応えた。その時、上記のように、心かたくなな者たちは神の言葉を聞かず、見ず、理解しないと告げられた。ローマのユダヤ人たちも、パウロが語る言葉を聞き入れなかった。だから、パウロは神の言葉は異邦人に向けられ、彼らが聞き従うと、ユダヤ人たちの不信仰を批判したのである。